

聖地



## ウロコのないホセ

---

ウロコのないピラニアのホセは、  
ある日、父親にうらみをぶつけた。

父さん、どうしてぼくにはウロコがないの？

ホセよ、よく聞け。  
おまえは逆子で生まれてきたから、  
ウロコは全部、母さんのおなかのなかさ。

ホセはいつも仲間はずれだった。  
おまけに野太いヒゲが生え、  
ついには、自分がナマズであることを知った。

父さん、ぼくはどうしてナマズなの？

ホセよ、よく聞け。  
おまえは出世魚なんだ。  
いずれ、勇敢なピラニアになる。  
海へ向かいなさい。

ホセは父の不貞にも気づかず、  
アマゾン河を下り、海に出た。

海水はウロコのない身体を  
容赦なく痛めつけ、  
ホセはついに小魚たちの餌となった。

死の直前、  
ホセの身体は腫れ上がり、  
イルカのように巨大化していた。

イルカたちは言った。  
ヒゲをたくわえたホセに言った。  
わが友に栄光あれ、と。  
父さん、ぼくはとうとう...

## 免罪符

---

死の商犬・流れ者のジャックは、  
罪深き犬族の弱味につけ込み、  
大量の免罪符をばらまいた。

これは神からの賜りものである。

十字架が刻まれたその骨に、  
犬たちは深く救われ、  
ジャックは町長としてその町に迎えられた。

ジャックは町にサーカスを呼び、  
各犬小屋に井戸を掘り、あてがった。

ある日、自分の倉庫を訪れると、  
職犬が困った顔で言った。

もう材料の骨がねえです、だんなさま。

そこでジャックは最後の一本を、  
懐に収め、町を逃れた。

のちに、犬たちは、自分たちが、  
免罪符とはいつわりの、  
ただの骨をつかまされていたことを知り、  
ジャックへの怒りと、  
免罪符を頼みに犯した罪におののくが、  
死の商人パウルという人間がこれを収める。

パウルは棒切れに十字架を掘り、  
これを犬たちに与えた。  
これが家畜化された犬族にとって、  
「棒切れ投げ」という、  
最高の遊びとなった起源である。

----ドグペディアより引用

## カマキチおじさん

---

ウイスキーを飲んでいると、  
目がまわってまわって。  
裏の泉に水を汲みにいったら、  
みなしごハッチに出会いました。

カマキチおじさん、いつ片目が治ったの？  
ハッチはぼくの片目を撫でて、泣きました。

ウイスキーの水を汲んでいたら、  
めがまわってまわって。  
思わずウイスキーのピンを  
泉に落としてしまいました。

カマキチおじさん、片目を奪ったお詫びに、  
ハニーバーボンでもご一緒しませんか。

ハッチよ、ぼくはもう酒はいらないよ。  
だから、おまえの最後の一刺しを  
ぼくのハートに捧げてくれないか。

## 自由な世界

---

夜中に。

舌を切られた文鳥がさえずり、  
羽をむしられたトンボが空を舞う。  
ようこそ、ここは自由の世界。

昼間に。

弦のないハープが子守歌を奏で、  
水のないプールで、子どもたちがクロールを競う。  
そう、これが自由な世界。

こんな世界だったら、  
僕が君を愛したって、  
ぜんぜんかまわないだろ。

## マンション犬ジョン

---

八階に住むマンション犬のジョンは、  
六階の排水口に住むネズミのハリーに告げる。  
二十四時間以内にこのマンションを退去すべしと。  
そのはらいせにハリーは、  
五階以下のゴキブリのハドソンファミリーに厳命した。  
三時間以内に一族の処刑裁判を執行すると。  
一族は判決を待たずに逃亡した。  
ジョンは名実ともに、  
マンションの陰の支配者となったが、  
テレビゲームに夢中の飼い主・ななこちゃんは、  
ジョンの散歩をすっかり忘れた。

## 予言

---

そのときには、星が墜ちるだろう。

そのときには、ラッパが吹かれるだろう。

そのときには、ぼくときみは空に投げ出されるだろう。

そして、ぼくたちのつないだ手と手は振りほどかれるだろう。

ちいさくなっていくきみ、

そらに吸い込まれていくきみ、

目と口を大きく見開いたきみ。

別れの挨拶もなし、

さようならの涙もなし。

やがてくる静謐。

やっとぼくらはひとつになれたんだね。

## おとうさんのうた

---

ぼくの足をかんだ犬を蹴り飛ばしたおとうさん。  
グローブの穴にタコ糸をくくりつけたおとうさん。  
公園のベンチでコカ・コーラの栓を指で引きちぎったおとうさん。

おとうさんは凶暴になって、会社を辞めて、  
きれいな女の人と韓国旅行に出かけて、やがて元気がなくなっていったね。

ぼくが結婚したとき、ニセモノのカルティエをくれた、  
子どもがうまれたとき、豪勢な詩を贈ってくれた、  
妹の結婚式のあと、行楽地で馬にまたがった姿は将軍そのものでした。

家を取られ、カツラをはずして、  
あとは笑っていただけになったね。

もう少しです。  
ぼくがおとうさんに寄り添うのは。  
もう少しです。  
ぼくがおとうさんをかっこよく抜き去るのは。



## 聖地

---

イモ虫のイモ吉くんが、  
半日かけて地べたを1メートル進んだとき、  
青ガエルのケロ郎くんは、  
先に行くイモ吉くんに追いつきました。

「これはこれは、  
『あの地』へ巡礼ですか」  
ケロ郎くんは明るく声をかけました。

「はい、半年計画です」  
イモ吉くんは無邪気に答えました。

1か月後、  
ケロ郎くんは「あの地」からの帰り道に、  
「あの地」へ向かうイモ吉くんに再会しました。

「『あの地』はどうでした？」  
イモ吉くんが問うと、  
「はい、極楽でした」  
ケロ郎くんが答えました。

極楽かあ。

イモ吉くんはその聖地を夢想しつつ、  
1ミリずつ前へと進みました。

聖地まであと2メートルのところで、  
イモ吉くんはさなぎになりました。

蝶になったイモ吉くんは、  
2メートル先の聖地のことなんか忘れて、  
美しい翼を広げて、青空の彼方へ飛び去りました。